

Title	書評：吉原直樹著『モビリティと場所：21世紀都市空間の転回』東京大学出版会、2008年
Sub Title	
Author	近森, 高明(Chikamori, Takaaki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2012
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.17 (2012. 7) ,p.128- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：吉原 直樹著

『モビリティと場所—21 世紀都市空間の転回』東京大学出版会、2008 年

近森 高明

周知のように、グローバル化の進展にともない、ヒト・モノ・貨幣・情報・イメージのフローが既存の空間的境界を越えて席捲するなか、社会理論にもパラダイムシフトが求められてきている。ハーヴェイはポストフォーディズムにおける「時間—空間の圧縮」を指摘し、資本蓄積の形態がフレキシブルになると同時に、不安定で移ろいやすい「時間と空間の新しい経験」を生みだしていると論じた。アーリは同じ事態を「瞬間的時間」の全面化にとらえ、社会的なものを領域的秩序とみなす思考を脱して、流動体のメタファーによって現在のグローバル状況を把握すべきだとして、社会学の基本概念を刷新する「社会を越える社会学」を提起した。こうしたグローバル化のもとでの社会理論のシフトを引き受けながら、いまだ整序されていない論点を多面的にとりあげ、それを都市空間の転回、とりわけアジア・メガシティの転回にそくして深めてゆくなかで、社会理論と空間論をつなぐ有効な回路を照らしだしてゆくこと——これが本書のおおまかな企図である。

ここから「モビリティと場所」という表題の前半部は理解できるだろう。流動する世界をとらえるため、社会的なものを構成するメタファーを（領域から流動体へ、または構造からネットワークへ）切り替え、フローとネットワークが生み出す複雑性とハイブリッド性に照準するという方向性——アーリのいう「社会を越える社会学」の地平——が、モビリティというキーワードのもとで展開されるのだ。いわば流動化する現実をとらえるための知の流動化であるが、しかしこの知の転換は容易ではない。社会を考えるさい、私たちはつい「領域的なもの」を持ち込んでしまう。モビリティを思考するには、たえず貼りついてくる領域性の思考をそのたびごとに解除するように、先にすすまねばならないのだ。同じく回避すべきは、近代主義的な二分法や単線的な発展図式である。静態的な二項対立や、何々から何々へという線形的な理解は、グローバル化の基層にあるモダニティの両義性をとり逃してしまう。現在の時間的・空間的経験の変容は、モダニティに宿る両義性が、グローバル化のもとでいかに形を変えつつ顕在化するかという面からも把握する必要があるのだ。

モビリティという問いの地平で、規定の図式を多重的に解除してゆく作業のさきに浮かびあが

近森高明「書評：吉原直樹著『モビリティと場所—21 世紀都市空間の転回』」

『三田社会学』第 17 号 (2012 年 7 月) 128-133 頁

るのが、表題の後半部をなす、場所というキーワードである。著者の整理によれば、場所については、従来、大きく二つの理解がある。ひとつは、空間が均質化されるなかで資本がかえって微細なヴァリエーションに敏感になり、さらなる資本を呼び込むために特徴づけをする「差異化の場所」としてクローズアップされていると理解する立場であり、もうひとつはより人文主義的といおうか、歴史から内生する本質的なアイデンティティをもち、親密性の拠り所となるような地点として理解する立場である。これらの理解は、だが結局のところ領域性の思考を逃れえていないと著者は指摘する。本書では、こうした旧来の理解に対して、多様な社会的関係や過程が互いに接合するなかで、何らかの創発性が胚胎するような地点に「場所のオルタナティブな解釈」を求めるマッシーやアーリの立場が援用される。グローバル化に依拠しながらも、同時にそれへの抵抗の拠点ともなりうるような場所の可能性が模索されるのだ。

本書はこのような「モビリティと場所」という問いを基軸に、何度もそこへと立ち返っては議論を深めてゆくというかたちで、大きく二部構成で各章が配置されている。まず第Ⅰ部「モビリティのなかの都市空間と場所」では、グローバル化研究の知見をふまえた理論的なセクションとして、モダニティに内在する両義性、グローバル化をとらえるメタファー、等々、モビリティと場所を問ううえで前提となる広範な議論の整理と批判がなされると同時に、都市空間におけるポストモダニゼーションとジェントリフィケーションの諸相とその問題性、ナショナルな境界を越えるグローバル・シチズンシップのあり方、国家によるガヴァメントからローカル・ガヴァナンスへの統治様式の移行、等々の応用的論点が検討されてゆく。つづく第Ⅱ部「アジア・メガシティにおける都市空間の転回」では、アジア都市の転回をとらえる理論的枠組みの整理をふまえたのち、アジア都市（おもにジャカルタおよびデンパサール）のフィールド調査にもとづく経験的なセクションとして、ゲーテッドコミュニティとスラムという分極的な都市空間形態、バリにおけるムスリムの増加とその背景、バリに移住する日本人の意識変容、アジア・メガシティに現出する世界性、等々の幅広い論点が、マクロな社会理論とミクロなフィールドの記述を往還しながら触れられてゆく。

*

以上の構成にあきらかなように、本書は、グローバル状況下での都市空間の転回を理論的にたどるアーバンスタディーズの系列、そしてアジアの地域コミュニティの動態を経験的に追いかけるエリアスタディーズの系列という、著者のこれまでの理論的・経験的蓄積における二つの大きな系列を交錯させるかたちで全体が編まれている。著者の長年のキャリアの集大成ともいえる本

書を前に、評者としては、まずもって著者の問題意識のスケールと、その背景にある膨大な知識とフィールド経験の蓄積、さらには、流動化する世界の全体像をつかもうとする知的な食欲の迫りに圧倒されるばかりで、なかなか本書を評するポジションがとりにくいというのが本音である。評者自身、都市空間をめぐる社会理論の最前線を探ってきた著者の数々の論考から一方的に学んできた身であり、またアジア地域研究についてはまったくの門外漢であるからだ。さらに内容の要約という点でも、いくつか出ている既存の書評ですでに目配りの行き届いた要約がなされている。要するに、評者としてできることがあまり残されていない。

そこでなかば苦し紛れに、ではあるが、以下、本書の叙述にあらわれる両義性の思考、ないしは非線形的思考の特質について論じることで、書評の代わりとさせていただきたい。ポストモダニズムが喧伝されて以降、モダンの思考を脱構築して両義性を称揚するという立場はよくみられるが、それらはしばしば掛け声だけで、じっさいに両義性の思考を展開できているケースは稀である。むしろ掛け声ばかりが大きいわりに、そのじつ無自覚なまま、モダンの思考の枠内により深く埋没してしまっている場合も多い——「モダンのあとにポストモダンがやってくる」という認知自体が、すでに単線的発展図式の典型例であるように。だが本書では、両義性の思考はたんなるスローガンではなく、具体的叙述の水準で鮮やかに実践されている。それは、一方では既存の二項図式を解除しつつ、他方で、可能性と危険性が互いに反転しあう批評的＝危機的なポイントを巧みに指し示す身振りとしてあらわれる。

たとえばグローバル化とローカルなものとの関係が内包する両義性について。資本主義による全面的構造化のもとで、ローカルなものが一方的に解体され、包含されてゆくといった把握の仕方は、すでに領域性の思考にとらわれていると著者は指摘する。「大きなもの」が「小さなもの」を併合するという「変形した領域性」がそこには潜んでいるからだ。別の言い方をすれば、そうした見方は、中心による周縁の包摂という二項図式のヴァリエーションにすぎず、むしろグローバル化が進展するほどローカル化が深化するといった、両者の相互浸透のダイナミズムを見据える必要があるという。あるいはより具体的に、メガシティ化がすすむジャカルタのローカリティがもつ二面性について。既存の地域の解体状況のもとで、ローカリティ、ないしは社会・文化構造に「防御的なセーフティネット」の役割が期待されつつある動向に触れながら、しかしそこには同時に、コミュニタリアン的な志向と結びつつ、創発性が擬似「創発的なもの」に転化してナショナリズムと共振してしまう反転の危険性があるとも指摘される。

だがしかし、著者の両義性への洞察力がとくに鋭さを際立たせるのは、本書の中軸をなす場所

をめぐる議論においてである。さきに言及したように、本書では基本的に、場所を、多様な社会的な関係とプロセスが互いに接合し、ネットワークとフローが凝集する点とみる、マッシーやアーリの理解を導きの糸としている。こうした理解自体に、まずはパラドキシカルな要素が含まれているだろう。フローの越境的な力は、ふつうは限定された範囲を想定させる場所の概念とは相容れず、場所を解体してしまうと考えられるのだが、しかしマッシーやアーリに従えば、そうしたフローの力をうまく逆用することで、そのもとで多様な諸実践との関係性が結ばれる創発的な場所をつくりだすことが可能だという。だがこのとき、もうひとつの両義性が働く。それは、場所を積極的に構築しようとする営みのうちに、ともすると領域性の志向が芽生えてしまう危険性である。フローがもたらす不安定で断片的な「時間と空間の新しい経験」は、その反動として近接性への渴望を呼び起こす。その渴望はゲーテッドコミュニティに極端に表出するような、排他的な閉鎖性を生み出す傾向性を含んでいるのだ。フローの解体作用を逆用しながら、しかも内閉化に陥らない仕方で、場所は育まれなければならない。

何重にもかかってくる両義性のありようを慎重に見極めつつ、反転の相のうちに見え隠れする可能性を互いに結びつけてゆくこと——そのさきによく著者がめざす、未到の場所の姿が垣間見えてくる。注意しておきたいのだが、このように逆説と反転の相を繊細に読み解くという身振りは、たんなる両論併記とか是々非々論とは質的に異なる。両論併記とは要するに、プラス面とマイナス面を冷静に判断できるような距離を対象から十分に取れているという、自身の特権的立ち位置を誇示する仕種であるだろう。そうした俯瞰的なポジションこそをモビリティの思考はまず疑ってかかるはずだ。確固とした立ち位置の確定が、そのまま線形的な思考を呼び込んでしまう以上、両義的な思考を持続することは、対象と、それに取り組むみずからの立ち位置のあいだの関係を幾度も再設定しつつ、遡及的に議論をすすめることにほかならない。度重なる再設定は、着地を断念して中空をホバリングしつづけるように、たいへんな知的労力とバランス感覚を要するだろう。

そうした遡及的な議論のすすめ方は、もしかすると、読者の側にも同様の労力を求める面があるかもしれない。じっさい著者の文章は、正直なところ、読み通すのにかなりの体力を必要とする（少なくとも評者にとっては）。個別の部分はひじょうに明晰なのに、一連なりの文章になると途端に難解にみえてしまうのである。これはしかし、個々の部分をつなぐ論理に問題があるわけではもちろんない。むしろこちらが線形的思考を抜け出せていないため、対象の両義性を精密になぞる論理のつながりを示されると、不意に議論の方向性を見失ってしまうからだ。だから読者

は行きつ戻りつ、既存の枠組みが解除される瞬間を確かめながら、議論を読みすすめていかねばならない。著者の文章を読むことは、非線形的思考のレッスンを受けることであり、そのぶん体力を消耗させられるのである。

フローのもとたす複数的な社会関係に開かれながら、同時に自己の独自性を主張しうる拠点をつくりあげ、しかもそれが排他的な閉鎖性に陥らないよう、つねに動的なダイナミズムを維持しつつけることで、ようやく確保しうるような場——本書で理論的に示される場所のありようを評者なりの言葉でスケッチするところなるのだが、こうした場所の理解はひじょうに抽象的で、具体的なイメージを抱くのが難しいかもしれない。また、幅広い議論を参照しつつ、あらゆる角度から場所の概念の練りあげを試みているにもかかわらず、本書には、必ずしも十分に議論が整序されているといい切れない面があるのも確かである。じじつ著者自身、本書の「あとがき」でこのように述べている。「もっとも、筆者の場所理解はようやくはじまったばかりである。本書に幕が下ろされようとしている段階でこの表白はいかにも無責任のようにみえるが、今後、場所を問い、そして問い返すことを繰り返すなかで、世界における自己の立ち位置を明らかにしていくしかない」と。

だが評者にとっては、到着点としての場所の概念それ自体も重要だが、そこに接近する問いのプロセスの厚みにこそ、本書の啓発的な意義があるようにも思われる。先述のように「モビリティと場所」という問いの地平に達するには、対象とみずからの立ち位置との関係を何度も設定しなおす、知の動態化と遡及的なアプローチが不可欠となる。もちろん本書の学術的意義は、グローバル時代の社会理論を縦横に読み解き、その知見をフィールド調査にもとづくアジア都市論と結びつけることで、場所という論点をめぐり、いくつもの重要な課題と可能性の所在をあぶりだしている点にあるだろう。そのことは間違いない。だが評者としては、そうした「学界的」な評価を十分に認めながらも、同時に、流動する現実にせまるための知の流動化を、たんに提唱するだけでなく、身をもって実践している点に、著者から深く学ぶべき知的態度があると受けとっている。

ひとつの到達点となるこの著書があらたな出発点となり、どのような方向へと問いが展開されてゆくのか、未到の場所を求める著者の旅の行方はますます見逃せないが、翻って読者の側としても、著者の投げかけた問いを受けとめつつ、自身の問いを深め、みずからの旅路を見定めることが試されている思いがする。

付記：なお、本書に対する既存の書評としては以下のようなものがある。

広田康生.2010.「書評 吉原直樹著『モビリティと場所』」『日本都市社会学会年報』(28), 276-279

松菌（橋本）祐子.2009.「書評 吉原直樹著『モビリティと場所——21世紀都市社会学の転回』」
『アジア経済』50(10). 57-61

斎藤純一.2009.「書評 吉原直樹著『モビリティと場所——21世紀都市空間の転回』」『社会学研究』(86).147-151

田中研之輔.2009.「書評 吉原直樹著『モビリティと場所：21世紀都市空間の転回』」『社会学評論』60(2). 314-315

[本体価格 5,400 円]

(ちかもり たかあき 慶應義塾大学)